

人体解剖学・神経科学

10年の足跡（主に20周年以後のあゆみ）

① 研究

本領域は昭和55年、福井医科大学解剖学1講座として教授・野条良彰、助教授・渡邊憲二で開講した。続いて青山裕彦（後に講師を経て助教授）と玉巻伸章（後に助教授）が助手となり研究を推進した。その後、浅本憲（本学1期生、後に助教授）、藤森一浩、飯野哲が助手となり、自律神経系を中心に形態学的研究を推進した。

平成14年、浅本助教授が愛知医科大学解剖学教授として転出し、現在に至る新たな教員構成となる。飯野は米国ネバダ大学への留学後、助教授として消化管運動の形態学的基盤をテーマに研究を進め、カハール介在細胞の神経伝達介在機構やWミュータントマウスの解析、線維芽細胞の特性研究を行い、平成22年より野条の後任として教授となった。伊藤哲史は平成13年京都大学理学研究科修士課程を修了し助手として神経解剖学的研究を進めた。トレーサー法、免疫組織化学法、蛍光in situ hybridization法など多様な手法による自律神経系の解析を行い平成19年学位・博士（医学）を取得した。聴覚系神経回路研究を展開するため平成20年米国コネチカット大学ヘルスセンターへポスドクとして留学し帰国後も同分野で研究を進めている。堀口和秀は早稲田大学大学院を修了し米国ネバダ大学医学部及び東京大学農学研究科でのポスドクを経て、平成16年助手となった。堀口は大学院、ポスドク時代を通じ消化管形態学で業績を上げてきた。現在はカハール介在細胞及び関連細胞の電子顕微鏡学的研究や消化管炎症など病態の解析を進めている。平成19年には堀口里美が大学院生として消化管カハール介在細胞の研究に加わり、発生における遺伝子解析により平成22年9月学位・博士（医学）を取得し、特命助教として更に研究を進めている。

研究生として平成3年から平成15年まで在籍した福谷保（長野医療技術専門学校）は骨格筋中の毛細血管の周皮細胞について研究し、平成22年学位・博士（医学）を取得した。同じく研究生・堀秀昭（福井医療短期大学）はラット体幹筋、特に尾の運動に関する詳細な解剖学的研究を完成させるに至っている。

② 教育

本領域は、医学科の教育として肉眼解剖学、組織学、人体発生学を解剖学2講座と共に担当してきたが、平成15年度のカリキュラム改正により、人体解剖学1として肉眼解剖学（中枢神経解剖学を除く）、個体の発生として人体発生学の教育を中心的に担っている。人体解剖学1では約40回の肉眼解剖学実習（含骨学）を全教員が指導している。約10回の講義は各教員が分担し、重要基礎事項の説明を行っている。個体の発生は約5回の講義と実習を行い、他に人体解剖学1の中で講義している。解剖学用語は医学の基礎として重要なため「人体解剖学・組織学用語集」を編纂出版し教育に用いている。本用語集の基礎は平成16-19年度の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「医学英語と医学・看護学の統合的一貫教育」の一環として作成された。また医学英語2として欧米の解剖学実習書を用いた講義を担当している。人体解剖学教育の一環として、春夏休みに局所解剖学実習を開催し、人体解剖学実習を終了した高学年学生および臨床科所属の教員・大学院生などが参加し、人体構造の学習研究を行っている。

看護学科の解剖学教育（形態機能論I及び形態機能論実習）も担当し、講義及び顕微鏡を用いた組織学実習、医学科学生と共に行う肉眼解剖学実習を行っている。その他、医学系研究科の医科学基礎総論及び医科学特論、工学系研究科の生命複合科学特論Iを担当している。

教育および研究を支える技能職員として、鈴木操（昭和55年－平成15年）、鰐淵勝隆（平成9－13年）、宮越久行（平成13年－現在）、中出博之（平成14年－現在）が御遺体関係の仕事や人体解剖学実習の補助を行っている。教室の事務補佐としては戸枝尚子（平成8－13年）、梅藤仁美（平成13－16年）、吉村良子（平成16年－現在）が在籍し、教育研究全般の支援を行っている。

今後の展望、これからの10年

これまで本領域では各研究者独自の考え手法を重視し固有の研究を展開し発展させてきた。今後も各自の発想を重視しつつ全体として協調して研究教育を推進したい。特に形にこだわり、形態学的視点を大切にしたいと考える。

（文責：飯野哲）